

## 例会記録

## 日本医史学会 3月例会

平成29年3月25日(土)

順天堂大学センチュリータワー3F北306

## 【日本医史学会創立90周年記念 特別例会】

## 第1部 日本医史学会創立90周年記念

酒井シヅ(前理事長)「日本医史学会の90年」

## 第2部 関連5学会の歴史と現状

日本歯科医史学会 西巻明彦 理事  
 日本薬史学会 三澤美和 前副会長, 現監事  
 洋学史学会 青木歳幸 評議員  
 日本獣医史学会 小佐々学 理事長  
 日本看護歴史学会 田中幸子 理事

## 日本医史学会 4月例会

平成29年4月22日(土)

順天堂大学10号館105

1. エボラウイルス感染症から学ぶ事 加藤茂孝
2. 池田瑞仙『痘家看病心得』(1840)にみる痘瘡の看病法 平尾真智子

## 日本医史学会 5月例会

平成29年5月27日(土)

順天堂大学御茶ノ水センタービル4F第2会議室

1. 1889～2014年のインフルエンザ超過死亡と公衆衛生——ウィルス循環, 経済水準, 予防接種の役割—— 逢見憲一
2. ヴェネチアから緒方家にやって来た“しろばあちゃん” 松田隆秀

## 例会抄録

水島治夫の府県別生命表と旧植民地生命表,  
琉球政府生命表

逢見 憲一

前回(平成27年5月例会)の発表では、沖縄を伝統的に長寿だったとする説の根拠となっている1921-25年分府県別生命表の刊行時期を含め、水島治夫による一連の府県別生命表の初出論文を検討した。

今回の報告では、水島が乳児死亡の届出漏れの問題に初めて直面したと考えられ、また水島の生命表研究の嚆矢でもある『朝鮮住民ノ生命表』における朝鮮住民の生命表、さらに彼の指導を受けた崔義楹や原藤周衛によるその後の朝鮮その他旧植民地住民の生命表や乳児死亡に関する研究を検討し、乳児死亡等の届出の正確性に関する認識の

変化について検討した。

水島は、一連の府県別生命表に先立って刊行された1938(昭和13)年の著書『朝鮮住民ノ生命表』において、朝鮮住民の乳児死亡について、1) 0歳死亡率が1歳死亡率より低いこと、2) 農村住民の乳児死亡率は低い一方で京城の乳児死亡率は農村の3倍と高率であること、などから、公式の統計による乳児死亡率は到底真実とは認容し得ないとした。その上でその理由について、朝鮮では今日でも乳児の死亡を親に先立つ不孝として軽視する風習があり、乳児の死亡を正式に届け出ずに

「暗葬」することが多いためであろうと推測していた。『朝鮮住民ノ生命表』において水島は、農村部を含む全朝鮮の生命表について、警察制度が厳重で比較的「暗葬」の困難と考えられる京城府の乳児および1歳死亡をそのまま転用していた。一方で、水島は、旧植民地在住の内地人については、乳児死亡率の正確性については疑念を持っておらず、低率な要因を、1) 知識階級の俸給生活者が多いこと、2) 出生の少ないこと、に求めている。

水島の「暗葬」論および乳児死亡の届出に関する疑義は、水島に先立って、1931（昭和6）年の生江孝之『朝鮮に於ける乳幼児死亡率に対する疑問と考察』（朝鮮社会事業）や同年の李覚鐘『乳幼児死亡率調』（朝鮮社会事業）などでも先駆的に検討されていた。

この『朝鮮住民ノ生命表』以降も、水島やその門下生たちは、朝鮮および朝鮮以外の旧植民地住民の生命表を作製し、乳児死亡の正確性について検討を続けていた。

『朝鮮住民ノ生命表』出版翌年の1939（昭和14）年には、水島の指導により崔義楹の論文『朝鮮住民ノ生命表 第一回生命表（昭和元一五年）ノ補充及び第二回（昭和六年一十年）精細生命表』が朝鮮医学会雑誌に発表された。ここでは、水島の逢着した困難の解決のため、全鮮各道の府、邑、面について、昭和9-11年の「火葬埋葬認可證」を借出し検討していた。検討の結果、特に著者である崔義楹の郷里である漁郎面では乳児死亡が京城と同程度にみられていた。しかし他の地域はやはり相当程度届出漏れがあると考えられたため、やはりこの論文でも京城府の乳児および1歳死亡をそのまま全朝鮮に転用していた。

さらに翌年の1940（昭和15）年水島治夫、細上恒雄の「満州（関東局管内）住民ノ生命表 第一回（昭和六年一十年）」（朝鮮医学会雑誌）では、同じ朝鮮人であっても、満州朝鮮人においては乳児死亡率が高いことが示されていた。同年、原藤周衛『道別朝鮮人生命表（昭和九一十一年）』（朝鮮医学会雑誌）は、上述の水島、崔らの著作、論

文を参照し、乳児死亡の届出の問題から乳幼児死亡率の算出を断念し、5歳以降の生命表のみ算出していた。

なお、1937（昭和12）年以前、人口動態統計は戸籍届出書から収集されており、乳幼児死亡に関しては詳しい製表すらなく、統計としての価値は小さいと考えられている。一方で、1938（昭和13）年以降の人口動態統計は、戸籍届出書から人口動態調査票を作成して、中央で集計される体制となり信頼性が大きく高まった。この新動態統計は1938（昭和13）年から1942（昭和17）年までの各年次について『朝鮮人口動態統計』として公表されている。

この新動態統計についても、水島やその門下生たちは検討を続けていた。原藤周衛は、1940（昭和15）年の『朝鮮人乳幼児死亡に就て二、三の考察』（満鮮之医界）において、1938（昭和13）年に全朝鮮の乳児死亡率が急上昇したことを指摘していた。また、朝鮮総督府通信局は、1940（昭和15）年の『昭和十三年人口動態調査に基く朝鮮人の生命表に就いて』（朝鮮総督府調査月報）において、1938（昭和13）年の統計を用いた通信局生命表は、上述の水島、崔らの生命表は正確度についてその比ではない、として比較を省略していた。一方で、水島と崔は、翌1941（昭和16）年の『在満（関東局管内）朝鮮人の生命表』（民族衛生）において、通信局生命表の乳児死亡率（ $q_0$ ）が在満朝鮮人の約半分には達していないことを指摘し、1938（昭和13）年においても朝鮮住民の乳児死亡届出の正確性に疑義を呈していた。

これらの水島らの分析は、第二次大戦後の人口学の研究者にも活用されていた。1972（昭和51）年、石南国は『韓国の人口増加の分析』（勁草書房）において、上述の原藤、李覚鐘、生江孝之等の議論を認めるとして、1938（昭和13）年以前の人口、出生、死亡を遡及して推計し、公表された統計と推計値との比が改善していったことを示していた。

このように、水島らは、朝鮮住民の乳児死亡について、1) 0歳死亡率が1歳死亡率より低いこと、2) 農村住民の乳児死亡率は低い一方で京城の乳児死亡率は高率であること、3) 農村でも信頼し得る地域では乳児死亡が多いと推測されたこと、4) 満州の朝鮮人の乳児死亡率は高いこと、5) 正確性の増した1938(昭和13)年以降の人口動態統

計では乳児死亡率が急上昇したこと、など多面的な人口統計学上の根拠から、その正確性には問題があったと認識していた。またこの認識は、第二次大戦後においても人口学の専門家には共有されていた一方で、近年では事実を踏まえない批判もみられていた。

(平成28年3月例会)

## 書 評

### 大野肅英 著 『歯』

各県の歯科医師会には、資料室的なものを設けているところがあるが、神奈川県歯科医師会には「歯の博物館」が併設され、公開されている。この本は、平成23年2月～4月に、横浜開港記念館で「痛っ、歯が痛い、歯科医学の誕生と横浜」展が開催され、そこで展示された「歯の博物館」や著者らの所蔵品を見て、同時に行われた講演会を聞いた法政大学出版局の編集者が、本書の執筆を依頼したことから「ものと人間の文化史」シリーズの一冊として刊行された。

著者は、日本歯科大学卒業、母校の大学院を修了、学位を取得したのち、1970年から横浜市で矯正歯科医院を開業するかたわら、約40年間にわたり歯科に関する浮世絵、引札、古書、お歯黒道具、房楊枝などを蒐集し、その一部は「歯の博物館」にも出展されており、現在は同館の館長になっている。

この本は、これらの資料と数多くの参考文献に基づいて、第一章 歯が痛い、では歯痛に際しての平安時代から江戸時代までの口中医による治療の変遷。第二章 歯を抜く、では健康な歯を抜く風習のあった縄文から弥生時代に始まり、医療としての抜歯について、麻酔術とともに記載。第三章 お歯黒をする、ではお歯黒の歴史とその風習の変遷。第四章 歯をみがく、では歯みがきの起源と、歯ブラシや歯磨き粉の宣伝合戦など。第五

章 入れ歯をつくる、では日本独自の技術である木床義歯やそれを製作した入れ歯師。といった章に分けて記載されており、最後は、第六章 発展する歯科医学、と題して、幕末から明治維新にかけて横浜居留地で開業したアメリカ人歯科医により、それまでの口中医、入れ歯師たちに代わって、西欧の歯科医療技術が導入されたことから始まる日本の近代歯科医学史の概要が述べられている。なお第三章を除く章にはコラムとして西洋の歯科医療などに関するこぼれ話が、羽黒勇司氏によって書かれている。

巻頭には、10頁に及ぶカラー写真により、①「病草紙」に描かれている挿画、②鯖稻荷の絵馬、③小林清親「百面相 歯痛」、④歌川国芳「きたいなめい医 難病療治」前歯の抜歯、⑤渡邊華山「一掃百態」居合抜の抜歯、⑥シーボルトの抜歯器具、⑦上流階級のお歯黒道具、⑧庶民のお歯黒道具、⑨喜多川歌麿「婦人相学捨鉢 かねつけ」⑩小林清親「百面相 かねつけ」、⑪歌川芳員「新板勝手道具」明治期のお歯黒道具、⑫房楊枝(日本)、⑬さまざまな歯木(外国)、⑭歌川国貞「俳優日時計 辰の刻」房楊枝による歯みがき、⑮歌川豊国「絵本時世粧」房楊枝・歯みがき粉が並ぶ楊枝店、⑯江戸期の粋な小楊枝、⑰作者不明「肌鏡花の勝婦湯」入れ歯の引札が張ってある銭湯の壁、⑱入れ歯師の看板、⑲入れ歯師の制作風景、⑳象